

埼玉県上田知事が「彩さい牛」を絶賛、地産地消の推進を強調



埼玉県の上田清司知事（写真中央）が27日、熊谷市内の森林公園ヘリテイジ・リゾート内のホテルヘリテイジで、彩さい牛生産者の植井敏夫21世紀肉牛研究会会長や農場管理獣医師協会（FMVA）の中村陽二理事、ミートコンパニオンの植村光一郎常務、ホテルの杉田憲康社長の4人と、埼玉県西部地区で生産されている「彩さい牛」を話題に地産地消を語った。

埼玉県産の農畜産物を消費奨励している上田知事は、旧知の杉田社長を通じて「彩さい牛」を知り、食べて「おいしくて絶妙な味だ。消費者の多いところで生産されているという事は、消費者も生産者も互いの声が聞かれることで良いことだ。間近過ぎて良い物の有り難みが分からないこともあるが、フードマイレージの見地からも、近場で健康に良い物が生産されることが望ましい」と称賛した。また「埼玉県産農畜産物のイメージアップのため、川下から自然を見せ付けることも大切であり、行政としても断固やり貫きたい。農村との交流の場が出来ることは地産地消の仕組みづくりの点からも大切」と述べた。植井会長や中村理事、植村常務は「生産者の農家が各自ばらばらに生産しているが、FMVAは、牛の生産から管理して安全・衛生を、流通からは流通業者や消費者の声を反映させたシステムを確立している」と力説。ウエイ畜産の社長でもある植井氏も「埼玉県の優良生産管理農場として生産に励んでいるが、今後とも地域に根ざしたおいしい牛を生産していきたい」と説明した。また杉田社長はこの秋にもホテル入口近くに「ファーマーズワークショップ」を作り、自社野菜やパン、彩さい牛など地元農畜産物の販売交流の場をつくる構想も明らかにした。

メキシコ・ハリスコ州の現地調査へ、農水省が7月上旬に派遣

別項（7面）、メキシカンポークセミナーの席上、MPEAのアントニオ・ボホルケス会長は、メキシコ・ハリスコ州の豚コレラが清浄化したことを受けて、農水省担当官が7月上旬に訪墨して現地調査を行う予定であることを明らかにした。日程等は調整中で、同州の検疫施設などを中心に豚コレラの清浄性と州の防疫体制などを調査する。現地調査の結果、問題がなければ同州からの日本向け豚肉輸出が解禁されるが、分析評価と手続きの期間があるため解禁の時期等は未定。